

第1回北海道150年道民検討会議 議事録

日時：平成28年6月10日（金）10：00～11：20

場所：ホテルポールスター札幌 2F コンチェルト

【出席者】

<委員>

山口委員長、石森委員、伊藤委員、生方委員、落合委員、加藤委員、菊谷委員、小磯委員、佐々木委員、鈴木委員、森専務理事【高橋賢友委員代理】、高橋はるみ委員、高向委員、竹田委員、谷本常務理事【棚野委員代理】、飛田委員、三好委員 計17名

<事務局>

（北海道経済連合会）菅原理事・事務局長

（北海道商工会議所連合会）守山事務局長

（北海道）山谷副知事、窪田総合政策部長、平野政策局長、岩崎北海道150年事業準備室長

● 窪田総合政策部長（事務局：北海道）

どうもお忙しい中をお集まりいただきましてありがとうございます。定刻となりましたので、ただ今から「北海道150年道民検討会議」を始めさせていただきたいと存じます。本検討会議の事務局を仰せつかっております北海道総合政策部の窪田でございます。よろしくお願い申し上げます。

はじめに、事務局を代表いたしまして、高橋知事の方からご挨拶を申し上げたいと存じます。

● 高橋委員（北海道）

おはようございます。高橋でございます。

本日は大変お忙しいところ、皆様方にお集まりをいただき誠にありがとうございます。会合の冒頭に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。既に皆様方ご承知のことと思うわけではありますが、松浦武四郎さん、「さん」というか、もう歴史上の人物でございますが、この方が明治政府に提出した意見書をもとに、明治2年8月に私たちが住むこの地域を「北海道」と命名されたところでございまして、今から2年後、平成30年、2018年でございますが、その時から150年目の節目の年を迎えるところでございます。この節目の年を、今を生きる私たち道民が、「北海道」の姿というものを改めて見つめ直し、歴史や芸術文化など、先人から受け継いだ財産を次の世代に継承するとともに、道内各地域が持つ多様な魅力を広く道内外、世界にも発信をする絶好の機会と捉え、記念事業を行いたいと、このように考えているところでございます。

この事業は、北海道の未来を見据えつつ、北海道の可能性を見つめ直し、新たな価値を創り出すとともに、その価値を多くの道民の皆様方と共有をできるような取組にしたいと考えているところでございまして、事業の基本方針を策定することを目的として、この度、「北海道150年道民検討会議」というこの場を経済界の皆様方と一体となって、設置・運営させていただきたいと考えているところでございます。

共同事務局での運営にご理解をいただいております道商連の高向会頭、そして今日は御都合で代理出席でございますけれども道経連の高橋会長には、改めて感謝を申し上げる次第であります。

また、後ほど事務局から説明があると思うわけでありませんが、大変お忙しい中、全体としての委員長をお引き受けをいただきました北大の山口総長には、心から感謝を申し上げる次第でございます。

ご参画をいただいた各委員の皆様におかれては、各分野の中心なお立場でご活躍をされているところでございます。北海道の将来に向けた思いなどをお伺いしながら、オール北海道での取組を進めてまいりたいと考えているところでございます。

この会議を中心に、より多くの道民の皆様方のご意見をいただきながら、北海道 150 年の節目の記念事業をしっかりと行ってまいりたいと考えておりますので、皆様方のご理解・ご協力、積極的なご議論を心からお願いいたします。よろしくお願いいたします。

● 窪田総合政策部長（事務局：北海道）

それでは、議事に入ります前に、委員の皆様方のご紹介と、委員長の選出につきまして、事務局の担当の方から説明をさせていただきます。

● 平野政策局長（事務局：北海道）

※席順に従って委員を紹介

石森委員、伊藤委員、生方委員、落合委員、加藤委員、菊谷委員、小磯委員、佐々木委員、鈴木委員、竹田委員、谷本常務（棚野委員代理）、飛田委員、三好委員、山口委員、高向委員、森専務（高橋委員代理）、高橋委員の順

委員長の選出についてでございますが、設置要綱によりまして、委員の互選により選出することとなっております。予め委員の皆様方にご意向を確認させていただいたところ、北海道大学の山口総長が委員長に選ばれておりますので、ここにご報告をさせていただきます。

これ以後の進行につきましては、山口委員長にお任せいたしますので、よろしくお願いいたします。

● 山口委員長（北海道大学）

委員長に選出していただきました北海道大学の山口でございます。

北海道大学も北海道に遅れますこと 8 年で 150 周年を迎えます。3 年前に、私が総長になって 1 年後に「北大近未来戦略 150」を策定し、私どもが 150 年を迎えます 2026 年に向けて、世界の課題解決に貢献する北海道大学を目標として取り組んでおります。北海道の 150 年に向けて、何かお役に立つことがあればと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

また、この場は北海道の 150 年を祝うための行事がいかにあるべきかということをご議論いただきます。活発な意見交換と円滑な進行へのご協力をお願いいたします。では、早速議事に入りたいと思います。時間の都合もございますので、議事の 1 から 3 「会議設置の趣旨」、「北海道 150 年事業基本方針及び今後の進め方」、「道民等の意見募集の実施」につきまして、事務局からまとめて説明をお願いします。

● 岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）

事務局の岩崎です。まずはじめに、本会議設置の趣旨について説明します。

【資料 1】道民検討会議の設置要綱をご覧ください。第 1 にあるとおり、本会議は、北海道 150 年事業の「基本方針」を策定することを目的として設置しております。第 2 検討事項は、事業の基本的な考え方や、主な事業の内容、推進体制などです。第 6 のとおり、この会議に「北海道みらいワー

キング」を置き、基本方針の策定に資する事業アイデアや、実施手法等について検討を行います。本会議とみらいワーキングは、相互に連携を図りながら検討を進めます。委員の名簿は、別表のとおりです。次に、事業の基本方針及び今後の進め方について説明します。基本方針は、事業実施の方向性や、枠組みを示すものとして作成し、この方針に沿って、実行委員会で個々の事業の検討が行われることとなります。

【資料2】をご覧ください。本会議が策定する「基本方針」について、皆様にご議論いただくための検討素材として作成したものです。一番上に「北海道150年」とあります。北海道と命名された年（明治2年）を基点としていることを記載しています。1の基本的な考え方ですが、4点挙げています。「基本理念」では、この度の節目に、これまでの歴史や、先人の偉業を振り返り、次の50年に向けた北海道づくりに継承する旨を掲げております。「事業の考え方」としては、「151年目の新たな一歩を踏み出す」「歴史や芸術などの財産を次の世代につなげる」「各地域の魅力や活力を道内外に発信する」こととしております。「基本姿勢」として、「未来志向」「価値創造」「道民一体」を掲げ、北海道の過去から未来への時間軸を意識して、北海道の新たな価値を創り上げる取組としたいと考えております。また、事業を展開する上で、核となるコンテンツが必要と考えます。キーパーソンとして、北海道の名付け親である「松浦武四郎」を例としてお示ししております。武四郎については、参考として【資料6】を添付しております。

2の事業の構成についてですが、今後検討・実施する事業を3つに分類しています。記載している事業はすべて例です。ひとつは中核事業です。記念セレモニーなどのほか、北海道の偉人やお祭り、うたを活用したイベントや、道外の地域とも連携した事業の実施、さらにはフォーラムの開催など、実行委員会が実施することを想定しております。2つめは、連携事業です。協賛イベントなどの事業も含めて想定しております。道や市町村、団体、民間企業等が主体となり、道内各地域での展開や、赤れんが庁舎を活用した開催などを考えております。

3つめは、その他の事業です。記念モニュメントの制作などを想定しております。事業の実施期間は平成30年の1月から12月までとし、中核事業の実施は、夏頃などを想定しております。

2ページをご覧ください。事業の推進体制として、官民の幅広いメンバーで構成される実行委員会を立ち上げることとします。実行委員会が担う業務は、実際には規約等で定めることとなりますが、方向性としては、事業計画の作成や、中核事業の実施のほか、事業全体の計画を把握するため、連携事業の登録等を検討しております。

また、事業のPRを効果的に行うため、キャッチフレーズやロゴマークを検討したいと思います。なお、キャッチフレーズは、4月に決定された北海道の新しいキャッチフレーズ「その先の、道へ。北海道」を活用することも含めて検討してはどうかと考え、関係資料を別に配付しております。このキャッチフレーズには、裏面に記載のとおり、未来と世界に向けて、積極的に前へ進んでいくという思いが込められております。また、情報発信の具体のツールとして、ホームページに加え、SNS等の媒体の活用も重要と考えます。

道民等の意見把握についてですが、3点記載しております。ひとつは、アンケート調査の実施です。2つめは若い世代を対象とした作文の募集です。3つめは基本方針原案への意見募集です。いただいたご意見や作文の趣旨は、可能な限り基本方針への反映に努めたいと考えております。

スケジュールですが、本年平成28年については、本会議において10月に基本方針を策定します。その後、実行委員会が主体となり、予算規模も含めて具体的な事業計画を検討します。来年29年のできるだけ早い時期に、実行委員会が、事業計画案、予算案を取りまとめ、実施に向けて準備を進め

ます。

8には、関連する政策課題とあります。現在、検討が進められているものとして、赤れんが庁舎のリニューアル事業等があります。こうした取組等について、今後、本会議に報告することを検討しております。

次に、【資料3】今後の進め方（案）をご覧ください。基本方針の検討が、幅広い参加のもと進められるよう、道民の皆様などからの意見募集を並行して行うことをフロー図でお示ししております。

次に、意見募集の実施の案です。【資料4】「作文募集」についての要項（案）をご覧ください。作文のタイトルは、武四郎が残した日誌にちなんだものとしております。募集するのは、道内在住の15歳から25歳までの方々を描く「北海道の未来」についての作文です。いただいた作文は、みらいワーキングでの審査や、優れた内容の作文については本会議での本人のプレゼンテーションを検討しております。ご参考まで、後ろにPR用のチラシの案を付けています。なお、JAグループ北海道様のご協力をいただき準備を進めております。この場をお借りして感謝申し上げます。

続きまして、【資料5】「アンケート調査」実施の案をご覧ください。ウェブサイト上に専用のフォームを設けて、北海道において次の世代に引き継ぎたいものを記入していただくほか、事業の検討に当たっての視点やアイデアを頂戴したいと考えております。なお、作文及びご意見の募集については、本会議でご了承がいただければ、速やかに実施したいと考えております。私からの説明は、以上です。

● 山口委員長（北海道大学）

ありがとうございました。ただ今、会議設置の趣旨、そして、今後策定を目指す基本方針の議論のたたき台と、道民から意見を聴く手続きなど今後の進め方が示されたところでございます。この事務局の案を参考として、委員の皆様から一通りご意見を頂戴したいと存じますので、よろしく願いいたします。それでは、石森委員から反時計回りをお願いします。大変恐縮ですが、お一人3分程度でお願いいたします。

● 石森委員（北海道博物館）

五十音の最初ということで、恐縮ですが最初に発言をさせていただきます。

私は北海道博物館の館長を務めておりますが、北海道博物館は昨年、新たに発足したものでございまして、旧開拓記念館とアイヌ民族文化研究センター、これを統合して発足して1年前にリニューアルオープンしております。

ビフォー&アフターで2点だけ申し上げますと、まず、入館者数につきまして、ビフォーは5万人、アフターは15万人を超えましたので、3倍以上を達成しております。

もうひとつの点は、6月5日に日本展示学会という展示関係では一番権威のある学会ですが、この学会賞、作品賞を受賞することができまして、常設展示では道内で初めて受賞したということでございます。

この会議そのものは、記念事業の基本方針を策定するということでありますので、2点申し上げたいと思います。

まず第1点は、先ほど知事のお話にもございましたように、キーパーソンは松浦武四郎ということでございますので、2018年に開催いたします私ども北海道博物館の特別展は松浦武四郎展を既に企画しております。松阪市にあります松浦武四郎記念館、並びに東京世田谷にあります静嘉堂文庫並びに

美術館、これは三菱財閥が作ったものでありますが、ここも武四郎の資料、貴重なもの 600 点がありますので、こういったところと連携して、松浦武四郎をテーマとする特別展を開催いたします。

第2の点は、今回の会議そのものが 150 年について議論する場でありますけれども、その前提として当然百年記念事業がどうであったかということは議論されるはずでありまして、今、北海道博物館が立地しておりますのが百年記念事業で造られました野幌森林公園、そして記念館、これが北海道博物館に変わったわけでありまして。その他に記念塔がありますし、また明治・大正期の北海道の開拓移民のさまざまな家屋を寄せ集めました開拓の村もございます。ただ、こういったものは年を追う毎に老朽化しておりますので、もはや 50 年前とは異なって、今は新たなハード整備を伴うものは困難であろうと思いますが、百年事業の際のことを再検討していただいて、貴重な資源でもありますので、是非とも受け継いでいく必要があるのではないかと考えております。幸い、2020 年に国の事業で白老に民族共生象徴空間が整備される予定になっておりますので、白老の地でアイヌ民族文化をテーマとする重要な空間が開かれ、それに対して、百年記念事業で北海道は力をあわせてつくりました開拓の村などにもご配慮いただきまして、両面で北海道の 50 年先を見据えるということも大切ではないかと考えております。以上であります。

● 伊藤委員（クリプトン・フューチャー・メディア(株)）

クリプトン・フューチャー・メディアの伊藤と申します。

私は生まれも育ちも北海道です。北海道以外のところに住んだことがない天然の北海道人として、専門は IT、クリエイティブなソフトと申しますか、ゲームとか音とか、いわゆるデジタルコンテンツ一般を取り扱っている会社を経営しております。

私の提案と申しますか、提言と申しますか、考えていることを申し上げたいと思いますけれども、「開拓の対象としての北海道」はもう既に終わっているのかなと思います。私は 51（歳）なんですけれども、北海道にずっと住んでいて、50 年前には、土地も産業も国が予算をかけて開発しないとダメと考えられていたのだと思います。でも、今、自分たちが住んでいるこの北海道は、もう開拓をする対象ではなくて、国の予算に依らずとも十分に自分たちの力で立って、自分たちの足で手でいろいろなことができるような状況に既になっている。そういう状況をまず認識した上で、受け身から転じてどうやって自分達が自生していくか、自分たちの力で立って、自分もそうですけれども、自分達の子孫や後輩が新しい北海道を自分たち自身の力で作っていくという自覚の場を提供するのが、北海道 150 年検討会議の使命として取り組むべきことなのかなと思います。

具体的には、例えば今北海道には、観光客が世界中から来ています。アジアの方だけじゃなくて、青い目をした、いかにも欧米人という方を時々目にしますし、そういう方々が北海道にいらして、僕の取引先も夏に北海道に、別に僕がいるからということじゃなくて旅行に来るのですけれども、どうやって北海道に気づいて、どうやって北海道を旅しようと思いついたかということ、間違いなくインターネットの影響です。ネットではあらゆる情報が検索でき、それを共有して、そして「次の旅行は北海道に行こう」となります。でも、その方々が北海道にもう 1 回来る保証はないのですね。つまり、北海道の次はオーストラリアに行くかもしれないし、他の全然違う日本のまちに行くかもしれない。次に行くべき旅行先の情報は全て共有されているのですね、インターネット上では。いかに北海道ファンをつくっていくのか、それも日本の中というのではなくて、世界規模で北海道のファンを形成するためのインターネット上の仕組みをつくっていくことが非常に大事だと思っています。北海道の人口は今 540 万くらいとされていますけれども、2 年前の数値ですが北海道の観光客は 723 万人いま

す。完全に北海道を訪れる人の数の方が、北海道に住んでいる人の数よりも上回っているわけですね。だからこの旅行客を北海道民に取り込むことができれば北海道の人口を倍にすることだってできる。

ですので、「北海道民」という概念自体を変えるという視点もあり得ると思います。つまり、インターネット上に「バーチャルな北海道民」というものを形成していくということがあり得る。そうすることで、北海道旅行のついでに北海道ファンという形で、「バーチャル道民」登録していただく。まあ、「なんちゃって道民」ですけど、ネット上に北海道ファンを形成するというひとつの理由づけになると思うのですね。そういった北海道のファンを形成することができれば、「今、こんなイベントがあります」とか、「新しい商品ができました」といった北海道の最新情報を常に発信して、北海道ファンに常に気づいてもらって、また来ていただく、買っていただく、ことができるということです。

ちょっと長くなりましたけれども、そういったIT的な視点から私は提案をしていきたいなと思っております。以上です。

● 生方委員（サッポロビール(株)）

サッポロビールの生方です。よろしくお願いいたします。

先ほど北海道大学も8年後に150周年ということを伺いましたが、実はサッポロビールも同じ年の1876年に創業して、今年が140年になりました。道民の皆様に本当に支えられましてここまで来まして、今年の4月にサッポロビール博物館をリニューアルしたばかりでございます。このビールの博物館というのは、日本で唯一北海道のこのサッポロビール博物館しかないということで、北海道の歴史と当社の歴史がすごくオーバーラップしているものですから、それを是非道民の皆様に発信したいという思いも込めてリニューアルしております。

サッポロビールは「ふるさとのために何ができるだろう」ということを北海道本社の企業スローガンとして活動しておりまして、とにかく北海道の素晴らしい財産、食、観光、あとはスポーツ、いろいろな文化、歴史、そうしたものを少しでもPR、あるいは支援できるイベント、協賛、媒体など全面的な支援を実施しているところでございます。

私、出身が群馬県ですので、北海道民ではございません。北海道に来たのは去年の春です。そこで来てから感じたところを、このプロジェクトを通じて意見として少し言いたいことがあります。北海道に来て非常に感じているのは、大変素晴らしい財産があるのですが、それが道民の皆さんからするとどうも当たり前になっている感じがします。その価値をもっとよく道民の方が強く認識されることが重要じゃないかなと思います。そうしないと、その良い財産のPRを一人一人ができないのではなにかと思います。農産物、水産物もものすごくよいものがたくさんございますし、北海道は、日本酒、ワイン、そしてビールもそうですけれども、いろいろなお酒があります。観光名所もたくさんございますし、名産品、文化も食以外にも、例えば家具文化、ガラス細工、馬文化などいろいろなものがあります。これが当たり前の日常にあるので、どうもうまく発信できていないのではないかと。要はブランディングが出来ていないのではないかと気がしています。

当社も、いろいろな自治体様と取組みを実施させていただいているのですが、現地へ行きますと名産品が多くあります。そこで「何がここは名産ですか」と伺うと、「いろいろなものがあります」という市町村も多いのです。やはりブランディングをするには、その地の名前が付いた何々とか、発信の工夫をしていく必要があるのかなと思います。それをきちんと戦略的に考えて道内でPRすることで、

道民の皆さんもそれを認識、実感する。そして、一人一人が道内外にいろいろな手段で発信できるようにすることが必要じゃないかなと考えます。

サッポロビールも微力ながら「Hokkaido Likers」というWEBページを持っていて、ここで北海道の食とか観光のよいものをどんどん発信しています。今、日本国内ではユーザー数がまだ30万ですけれども、海外、特に東南アジアを中心としたお客様の数は150万を超えています。そういう媒体も含めて、道内企業と連携を強めながらしながら、良いものをどんどん発掘してPRすることで、北海道のよさを道民の皆さんが実感していけるのかなと思います。

一人一人が北海道の良さを認識して行動する、先ほど「道民一体」という方針がありましたが、そういう具体的な取り組みが必要じゃないかなと思います。以上です。

● 落合委員（株）日本旅行北海道）

日本旅行北海道の落合でございます。

隣の生方委員が群馬県出身ということをお聞きしたんですけれども、私は隣の栃木県出身でございます。新入社員で札幌に配属になりまして、非常に変わったサラリーマンでございまして、1回も転勤したことがございません。再来年で北海道丸40年ということで、その間、最初に北海道に来たときから北海道のいろいろなところを見させていただきましてけれども、正直言います、こんないいところは日本にないでしょうということでもあります。

私どもは旅行業でございますから、観光の切り口からお話させていただきたいと思うのですけれども、その前にですね、この新しいキャッチフレーズを見させていただいたのですが、非常に素晴らしい。「その先の、道へ。北海道」ということで、頭の中にパッと映像が浮かんでくるような感じがしまして、とってもいいなと思いました。

さて、観光で考えた時の話であります。ここに来て海外から本当にたくさんのお客さんが来られています。旅行業、それから宿泊も含めて、海外のお客さんにはたくさんお金も落として頂いているので、経済的にも非常に効果が上がってきております。そういう中で、今日は隣に加藤委員がいらっしゃるのですけれども、私は前々からアイヌの紋様、渦巻きは力で、尖ったところは魔除けとか、デザインがすごく綺麗です。海外、それから国内の他府県から千歳に来られたときにですね、カウンター職員が、皆さんちょっとハワイのホノルルを想像していただきたいのですけれども、到着したときに空港職員とかが、あのデザインのアロハシャツみたいなものを着て出迎えると、ちょっと雰囲気が変わってくるのではないかなと思うのです。特に夏場、私ども旅行会社のカウンターやホテルのフロント等でですね、ある程度決めて頂いた範囲の中で、そういうイランカラマテのお迎えの気持ちで全体が関わっていくと。それは、各企業が協賛していけばいいだけの話ですので、ある程度決まれば、経済的にもそんなにかからないのではないかな、そんな感じがします。そういう形でアイヌの素晴らしさをもっともっと広めていくと。それが、ひいては次の観光客の発掘にも繋がるのではないかなというふうに考えます。

同じように、北海道の命名150年ということで、貸切バスそれからタクシーとかにステッカーとかで、事前からいろいろな表示をしていって、小さい目と目が触れるところのPR活動、先ほど伊藤委員がネット系の話もされていましてけれども、双方向で盛り上がりをつくっていくと、民間もしっかり応援しながら進めるということで、素晴らしい150年の記念事業できていくのではないかなと、このように考えます。

簡単ではございますけれども、私の方からは以上です。

● 加藤委員（(公社)北海道アイヌ協会）

イランカラテ。公益社団法人北海道アイヌ協会の理事長をしております加藤と申します。

はじめに、この北海道 150 年、先人から受け継いだ貴重な財産を次の世代につなぐ、大変、今日、有意義なこの会議に出席させていただいたことに、まずもって皆さんに感謝を申し上げたいと思います。

近現代の歴史において、アイヌと和人、光と影がありました。ともに、今日の北海道の発展の礎をつくってきたと私は思っております。

皆さんもご存じだと思いますけれども、択捉島に日本の領土である標柱を建てた近藤重蔵、このこともアイヌの案内があったからできたことでありますし、札幌から中山峠を通過しておりますね、あれは本願寺街道といって、あの山の中をアイヌが案内したというのがあります。ロシアとの領土交渉、日本の主張の根拠になった間宮林蔵、このことについてもアイヌの案内があったからこそその実現であります。さらに、今日話題になっております松浦武四郎先生もアイヌの案内があって、北海道の地図をつくって、アイヌ語の地名を 1 万いくつ残したという記録が残っております。そういったことで、北海道の人口は、明治元年は 6 万人です。明治 31 年は 85 万人です。大正 7 年で 216 万人、現在が 540（万人）と言われている世界でも類のないような増加の仕方をしております。

いろいろな意味で、過去には無視された少数のアイヌですが、その個人の出自に由来する民族としての背景は、全ての人々が持っている基本的人権だと私は思っております。全ての間人はこの世に生まれるときに、産声を発声します。その産声はどの個人もさほど変わらないものです。人は、父、母から発せられた言葉や言語、文化、社会によって生まれ、初めて人間となり、その社会集団から身につけた言語や知恵、技術を次の世代に受け渡すのが文化遺産なんです。アイヌはそれが断絶されていたということ。

しかし、2008 年、国会決議で、「我が国が近代化する過程において、多数のアイヌの人々が法的に等しく国民でありながらも差別され、貧窮を余儀なくされたという歴史的事実を厳粛に受け止めなければならない」とのくだりは、実質的に、一方的に無主の地として日本の領土に組み入れられたということなのです。

私、当年 77 歳になるのですが、疲れますよ。(笑) 77 歳なのですけれども、77 歳で開拓者の苦勞を見てきた一人なのです。それはもう大変だったということは私にはわかるのです。当時、本当にそういう意味では、助け合いの精神が生活を保っていたなと思っております。アイヌの人は漁業をする人が多かったのです。ですから、その漁業で獲れた魚をですね、開拓者に無料で運んで、開拓者の人もね、生活するのに大変だと。冬のこの寒い時期にどういうふうにして生活するか。家を建てるのに板もない、何もない。そんな状況の中ですから、本当に助け合いの精神があつての社会だったと私は思っております。中には生活が困って、自分の子どもを育てられなくて、本州に帰るためにアイヌに子どもを預けて帰る人を、私としては多々見ておりました。

私たちアイヌ協会は、過去を忘れることはないけれども、違いを水に流すこともなく、理解し認め合う社会だと思っております。共生の社会建設と思っておりますので、どうか今日集まっている皆さんも今後ともよろしくお願ひしたいと思います。

以上です。ありがとうございました。

● 菊谷委員（北海道市長会／伊達市長）

伊達市の菊谷でございます。

伊達市という名前の由来はですね、仙台の南に亘理伊達家という仙台藩の一門がございまして、明治2年の8月23日、さっき知事さんのご挨拶にもありましたけれども、開拓使ができて翌年に有珠郡支配を命じられたという形で移住してまいりました。当時、仙台藩自体は石高が約半分に減らされたのですが、亘理伊達家一門は、2万4千石だったのが、わずか58石ということで、その当時の領主が私財を、個人的な財産を全部売って、開拓に来た。それが明治3年でございます。

伊達市は、北海道が命名された年に開拓の許可が出てますので、翌2019年に開基150年というのを予定しておりますので、多分、北海道150年の後ですね、私のところみたいなまちが次から次に出てくると思いますので、そういうつながりもまたいいのかなという気もいたします。

それから、今、加藤理事長からお話がありましたが、市史を読みますとアイヌの皆さんにお世話になったというのが何回も出てくるのです。

最初、室蘭の絵鞆かどこかに降りたのですが、市史を読みますと、当時3月か4月にかけて、雪が降ってまして、着いたときに子ども達が泣いたということでございます。

また、松浦武四郎さんにつきましては、私どもの近くに旧洞爺村、現洞爺湖町に武四郎坂という坂がありまして、地名があるくらいですから、相当繋がりが深かったんだと思いますが、残念ながら市史を読みますと、開拓使の時代に、伊達家とはちょっと合わなくて、市史の中にはあまりいい話が出てこないのですね。それは多分、お互いの意見の食い違いがあったのかなと思いますけれども、そういう歴史的な経緯があって、伊達市というのがございますので、是非、北海道150年に続くような取組をしていきたいなと思っております。

それと、先ほどのお話の中に、意見の募集というのがございました。15～25歳ですか。是非、自治体の職員にも、今結構若いのが出てきておりまして、彼らも市町村の職員として頑張ろうと思ってる時に、こういう公募があれば自分達の思いも伝えていけるのではないかと思いますので、市長会、町村会を通しながら、そういう声も聴くことができればいいなと思っております。

それから、経済的なメリットで言いますと、札幌市とか函館市とか、そもそもそこがブランドというまちと、我々のように「伊達市ってどこにあるの？」って言われるまちの違いというのはございます。

そういう面では、北海道ブランドというのは非常に有り難いブランドでございまして、是非我々としてはこの150年をひとつのツールと思っておりますので、その価値で我々がどういうものをつかっていけるのかというご提案もできればと思いますし、現在伊達市は、農業でいうと大生産地ではございませんので、何が勝てるのかなと思ったら、野菜の種類が多いってことだけは絶対勝てると思うので、道の駅を中心に、できるだけ野菜の種類を増やそうということと、それから一年を通して野菜を作ろうということに懸けております。先ほどネットの話が出ましたけれども、そういう情報をもっと出せるような取組をしていただければ、我々も頑張り甲斐があるのかなと思いますので、よろしくお願ひしたいと思います。

以上でございます。

● 小磯委員（北海道大学公共政策大学院）

北海道大学の小磯でございます。

北海道150年事業、この検討会議で基本方針の策定ということですが、私はやはり大切な

は、この事業の理念、それが北海道民全体で共有されながら進めて行くということではないかなというふうに思います。そういう意味では、この150年という時間軸の中で、北海道の伝統というものをしっかり再認識し、そこに誇りと責任を持って次世代につないでいく、そういう取組にしていくんだというところをしっかりと軸に据えていく必要があると感じております。

私自身の活動分野から申し上げます、地域の開発政策というのを専門にしておりますけれども、実は150年前というのは、まさに北海道が近代国家を目指して地域づくりをスタートさせた時期。そういう意味では、この150年という時間軸、北海道においては、まさに北海道という地域づくりをどのような形の政策で成し遂げられてきたのか、それをしっかり検証して、その政策というものを改めて道民が共有して、次の50年後につなげていくという意味合いがあるのではないかなというふうに思います。

私自身は、経済協力というような活動で、海外の途上国とかそういうところでも活動しているわけですが、北海道というのは近代国家としてスタートして大体1世紀、100年で人口が500万、ヨーロッパのいわゆる中堅の先進国、デンマークとかフィンランド並みの経済規模を作り上げた。その地域づくりの政策に対しては、幅広い方々が高い関心を持っております。そこには、誇るべき北海道としての地域づくりの、政策づくりの財産が私はあるのではないかと思います。そこには、先人の努力、創意工夫があると。そういう政策の系譜というようなものを、この機会にしっかりと具体的に整理して、次の世代につないでいくというような取組は、150年というこの記念の節目の取組として、私は大事だと思う。そういう政策の検証は、実は、今後の50年後の北海道の、それこそ先ほど伊藤さんが仰っていましたが、自力で地域づくりを目指していく、それに繋がる道民自身の意識醸成というものも私は生まれてくるのではないかなと思います。そのような取組を是非目指して欲しいなと考えております。

以上です。

● 佐々木委員（(公財)北海道青少年育成協会）

北海道青少年育成協会の佐々木でございます。

基本方針については、もちろん全く異論はないのですが、ひとつ申し上げたいことがあります。次の世代につなげるというところで、歴史や芸術文化だけではなくて、産業も入れた方がいいのではという気がいたしますが、それ以外は賛成でございます。

読ませていただいて、ちょっと感じていることを2、3申し上げてみたいと思います。

加藤理事長がお話されたとおり、150年間、アイヌの人たちも含めて懸命に北海道をつくってきた人たちがいるということです。そのことを、青少年に伝えたいという思いがあります。その目的のために、道民の誰もが活用できる北海道150年のデータベースが欲しいなと非常に感じております。もちろん個別には、北海道の花とか北海道の祭りとか、そういう情報が道庁の中にはたくさんあるのは知っているのですが、もっともっと使い勝手がよい、いろいろなことが網羅されている情報があって誰もが使えるっていう環境があれば嬉しいなと感じております。

それから、北海道の強み、経営資源って何かと考えると、誰もが食、農業っていうふうにと考えると、もうひとつ忘れてならないのが「森林」だと思います。環境というテーマに関わる分野でありますので、北海道の面積の7割が森林だと聴いておりますので、これもひとつテーマとしてあげられるのではないかと思います。

それから、アイヌ文化とか縄文とか産業遺産とか、そして最近ではITとか宇宙産業とか、こうい

うテーマ別のコア事業がこれから検討されていくんだと予想いたしますが、せっかく作り上げるわけですから、記念事業終了後に、関係性と意欲のある市町村に移管することを考えてみては如何でしょうか。そして、継続することを前提にして考える、そういう視点も欲しいなと感じました。

それから、投資になるかと思えますけれども、北海道が素晴らしい資産や価値を持っていることがあまり知られていないという話が多々出ておりますので、投資として、海外メディアを招待してはどうでしょうか。お金がかかることではありますが、やっておいていいような気がいたします。特にアイヌ文化は、爆買いをしてくださるお客様ももちろん大事なんですけども、欧米には伝わっていないという話を聞いておりますので、そういう意味では、メディアを通じて周知をさせることが必要だろうと思います。

企画されるかどうかはわかりませんが、アイヌの素晴らしい舞踊と音楽を、イベントの中で用いて成功して欲しいと心から願っております。そのプログラムの工夫と訓練を重ねることによって、もし150年記念事業で魅了することができれば、次は2020年、東京オリパラの国立競技場へ持っていくことも夢ではないと思いますので、頑張ってもらいたいと思います。

いくつか申し上げましたが、以上でございます。

● 鈴木委員（(株)クリエイティブオフィスキュー）

クリエイティブオフィスキューの鈴木でございます。

弊社は来年2017年で創業25年目を迎えます。大泉洋、安田顕等TEAM NACSのメンバーが全国で活動をはじめて十数年たちますが、北海道150年からみると（創業25年は）6分の1、地元・北海道にこれからもっと貢献させていただかなくてはと考えているところでございます。

コンテンツの分野をはじめ文化的な産業を北海道で展開することは当時さまざまな課題があり、コンテンツ制作のスキルアップ、役者のスキルアップを図るために十数年前に全国展開をスタートさせました。東京での活動が増えて改めて感じたのは北海道の素晴らしさですね。我々は、東京での活動でスキルを磨くとともに、北海道の企業として独自のコンテンツをどのように創っていくかということに常に意識して活動して参りました。

先日、8年間続けさせて頂いているJAグループ北海道提供のテレビ番組「あぐり王国北海道」が、日本マーケティング大賞の地域賞という大変光栄な賞を受賞いたしました。「あぐり王国北海道」は、テレビの番組で、北海道の素晴らしい食材を北海道の子ども達に食育として伝えたいという私自身の子育ての経験を通じて生まれた思いから企画させていただいたことがはじまりでしたが、今や国内はもちろん香港、台湾、タイでも放送され、北海道農業の魅力を発信し食と観光を通したインバウンド観光客の増加に貢献していることが評価されました。

食や観光等北海道の魅力発信という点では、映画『しあわせのパン』（2012年公開）、『ぶどうのなみだ』（2014年公開）で、地域をクローズアップした作品づくりに取り組みました。地域と密着したコンテンツ創りによって地域の価値をもっと引き出そうと『しあわせのパン』では洞爺湖町の月浦地区で、『ぶどうのなみだ』では空知を舞台に撮影を行いました。さらに、作品づくりにおいてはパートナー企業の獲得にも注力し、地元企業だけでなく東京の映画制作会社や配給会社等も巻き込んで、北海道応援をしてもらっています。我々はこうした北海道応援をしてくれるパートナーに北海道の魅力を伝え、パートナーと地域とをつなげる役割を担い、これからも北海道、特に地域をテーマにした長く大切にされるコンテンツ、伝えていけるようなコンテンツづくりを、次世代の若い人たちと一緒に企画して取り組んでいかなければいけないのだと思っています。

そのためには、先ほどからお話されていらっしゃるアイヌ文化についても我々自身ももっと勉強し、今後のコンテンツと組み合わせた中で伝えていくことができたらと感じております。

この場で私自身も勉強させていただきながら、提言させていただければと思っております。よろしくをお願いいたします。

● 竹田委員（株）北海道日本ハムファイターズ

いつもお世話になっております。

いつもファイターズを応援していただき、そしてご支援していただきまして本当にありがとうございます。この場を借りて感謝を申し上げます。ありがとうございます。

ファイターズはスポーツを通じたコミュニティを推進していきたいと考えております。今、高橋はるみ知事に応援団長をしていただいております北海道179市町村応援大使、チームの選手が2名ずつ毎年18の市町村を訪問して、各市町村のPRをしたり、ブランディングをしたり、町おこしをしたり、村おこしをしたり、笑顔を届けたり、健康を届けたり、そういう活動を地道にしております。10年間で180市町村に行けますので、まだ始まって4年目なのですが、確実にこれを進めていきたいなと思っております。ファイターズは本当に北海道の道民球団として地域密着をし、本当にチームの勝利に向けて一丸となってひたむきに戦う、最後まであきらめないで戦う、そういうところから道民の皆様、また全国のファンの皆様に夢とか希望とか、そういうものを提供する球団です。

今後は、一番最初に申し上げましたように、スポーツを通じたコミュニケーション、スポーツを通して北海道の皆様方に貢献できるような、地域に対して密着できるような、地域と共生できるような活動を、この会議の中でいろいろな方々とお話しながら取り組んでいきたいと思っております。

2018年、北海道は150周年、ファイターズは2018年で北海道に来て15年です。これも何かの縁だと思っております。ここに選ばれたのも、私は未熟者なのですが、できることを一つ一つ皆様と共に取り組んでいきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

● 谷本常務理事（北海道町村会【代理出席】）

北海道町村会の谷本と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

特に150年ということでもないので、私ども町村会では、6年前から道内の町村のことを道民にもっとよく知ってもらおうということで、特に、都会の方に向けて、「あなたのふるさと、どこですか？」というキャッチフレーズで、町村の魅力をPRする活動を行ってきました。具体的には、新聞に意見広告の折込チラシを入れたり、ラジオ番組で1回につき1町村ずつ出演してもらい、1年半かけて道内144町村を取り上げたり、いろいろやったのですが、すごく思ったのは、例えば新聞折込チラシの表には意見広告を載せたのですが、チラシなので裏があります。裏に何をしようかなと思いついて、道内の白地図を載せたんですね。市町村名だけ入れました。特に、子どもに興味を持ってもらおうと思い、「あなたが訪れたことのある市町村に色をつけてみましょう」というそれだけで配ったのです。そしたら、表にはあまり反応はなかったのですが、裏にはものすごい反響がありまして、多かったのは道の駅とか、観光をやっている方々からたくさん欲しいという声があったのと、小学校の先生からも教材として使いたいと随分反響がありました。その中で一番多く褒められたのは、「市町村名によくぞ平仮名をふってくれた」という話なんですね。市町村名には読みづらいものが多いのですが、こんなに反響が大きいとは思わなくて、それからいろんなイベントでこれを使うようにしています。さきほど、菊谷市長会長から伊達市の場所のお話がありましたけれども、町

村によっては、どこにあるのかわかってもらえないどころか、名前さえも読んでもらえないという現実があります。特にアイヌ語由来の名前も多いので、150年という契機に、道民の方が北海道の歴史を振り返ったり、見つめ直すいい機会だと思います。これだけで単独事業ということにはならないでしょうけれど、ぜひ何かの事業の中で市町村名、特に町村名がなかなか読めないと思いますので、そういう工夫もしていただければいいなと思ったところでございます。

以上です。

● 飛田委員（北海道農業協同組合中央会）

第一次産業といいましても、私は農業者ですから農業の関係でお話をさせていただきたいと思いますが、北海道150年は、他県と比べると大変短い期間の中で農業が展開されております。ただ、北海道は食料自給率がカロリーベースで200%を超えるという方向で、今、頑張っています。いずれにしても、この短い期間で、農業がこれだけ発展できたというのは、面積が他県と比べると10倍以上の収入面積があるという必然的な面もありますが、いずれにしても150年前から府県から北海道にお越しをいただいて、「よし一旗揚げて帰るぞ」という方々が帰らないで残っていただいたからこそ、北海道の開拓が進んだと。そして、150年でこれだけ、県と比べると、大きな農業大国が北海道にできたという、非常にありがたいことであり、私どももそのことをしっかり根底に置いて、頭に置いて仕事をしているというのが事実でございます。

ただ、北海道農業は厳しいものがございます。農業者というのは、この厳しさをどのように乗り越えていくか、これが農業を営む、農業を経営する基本なんですよ。この基本をどのように進めていくのかということが北海道農業の特徴ですから、それを私どもはしっかりと見つめながら進んでいこうということで、実は、昨年、大会を開催させていただきました。私どもは、もう自分たちだけで農業を進めることの難しさ、いわゆる地域にどのように理解をしていただくか。食料の大切さ、食育の大切さ、そのことをどのように理解していただくのかということで、大会のメインテーマに、550万人とともに歩むというそういう命題を付けさせていただいて、これから北海道農業が日本の食料をどのようにしっかりと確保し、供給していくかという責任を果たしていこうと認識しております。

鈴井社長にも大変お世話になっております。「あぐり王国北海道」、皆さん観ていただいていると思います。土曜日観ていただいていると思います。土曜日の5時です。ぜひ観ていただきたい。これだけHBCさんで放送している・・・あんまり放送局の名前言わない方がいいのですか。(笑)かなりの視聴率だと聞いております。視聴率が高いということは、北海道における農業の大切さということを皆さんがしっかりと理解しているということにつながるのだろうと私は思います。

私も本当に嬉しい限りですし、特に日本ハム、コンサドーレの皆さんとも、ともにしっかりとした連携をとりながら、あるいは大学の方々とも連携をとりながら一生懸命頑張っておりますが、いずれにしても地域における農業の大切さ、食育の大切さをどのように広めていくのかというのが150年以降の大きな問題になるだろうと。そして私どもがどのようにそこに培っていくかという、それを大事にしていきたいということです。北海道ではお陰様で基幹産業として位置づけさせていただいておりますので、これに恥じないようにどのように進めていくかしっかりと努力していきたいと思っておりますので、今後ともよろしく願いいたします。

● 三好委員（株）北海道新聞社

北海道新聞の三好でございます。あまりにも大きなテーマでございますので、3分程度お話をしろ

ということですが、今まで迷っておりました。どうせ順番としては最後でしょうから、先にお話された方々のいいところ取りをしようと思っていたのですが、大変いい意見がでましたので、私はちょっと別の観点から述べたいと思います。

150年。先住民族の長い歴史からみるとすごくわずかな時間で、しかも通過点に過ぎません。しかし、その機会にここの基本的な考え方にあるように、我が北海道を見つめ直す非常にいい機会だと。

ここから先は私、新聞記者の独断となりますが。私のルーツは徳島で、北海道は三代目です。おそらく北海道に渡ってきた人の大半は、生活に困っているか、そのほか諸々の事情で、つまり困難を抱えて渡ってきたのだらうと思います。そうでなければ、津軽海峡というしょっぱい河を渡るはずもないし、こんな寒いところにあえて来る必要もない。来てみてこんなに寒いのか、失敗したという思いをもった人も多いでしょう。しかし、春になると一斉に花が開いてきます。ああこれなら生きていけるかもしれないということで希望をもったのだと思う。同時に、おそらくしがらみの無さといいますか、北海道に来て煩わしい人間関係とか、門地門閥、本家分家とかということから解放された自由さ。ここに勇気をもった人が多いのではないかと思います。従いまして、私が思うのは、しがらみの無さがある意味で自由で多様な価値観を生んで、だからこそお互いを認め合って、自然条件とか経済的困苦の中で生きてきたということをおぼろげに得ない。

北海道は150年が経ちましたから、それなりのしがらみとかマイナスの面が出てきているのかもしれませんが、ここにおられる高橋知事にしても高向さんにしても、北海道生まれの方ではありません。だがトップリーダーとして何の不自然な感じもなくおられるということは、まさにしがらみの無さであり、北海道のオープンな、自由な気風が生んだのだと思いました。私の思いは、それを改めて確認する。もしそれが150年の間に錆び付いているのであれば、もう1回磨き直すということかなと。

ここに書いてあります基本姿勢で、新しい価値をつくり出すというのは結構ですけども、道民が一体となってという言葉は、何か挙国一致じゃありませんが価値観が狭められやしないか。この大地にはひねくれ者がいてもいい訳です。いろんなことがあったからこそ、自由奔放な北海道に来て、しかも、いろんなことをやって成功している。また挫折する方もいる。そういう包み込む大きな舞台、そういう北海道のあり方というものをぜひこの機会に考えてみたいなと思っております。

抽象的で申し訳ありません。以上です。

● 森専務理事（北海道経済連合会【代理出席】）

共同事務局でございますし、経済連合会という立場でございますので、今伺いました皆様のご意見を踏まえまして、この記念の年に、北海道全体の経済の発展につながっていくよう、知恵をこらしていきたいと思っております。発言は以上でございます。

● 高向委員（(一社)北海道商工会議所連合会）

商工会議所の会頭という立場であります。今日は自由に発言ができるようでして、ひと言私の意見を言いたいと思います。

全体の組み立て方としては、全く異議はありません。どこか漏れているのではないかとこの観点で、最後の発言者として考えたことですが、この150年のイベントを先住民族のアイヌの方々が一緒に喜んでくださるように、そういうものに特に配慮していただきたいと思っております。光と影の部分が合ったけれども、協力した部分も相当あるというお話は非常に感激をしました。お話の中で知ら

なかったことは、本州から北海道に来た和人で、失敗して本州に戻る人たちがいたと。子どもを預けていったと。どこかで聞いた話だと思いました。これは第二次世界大戦で日本が負けた後、満州に子どもを置いてきましたね。これですよね。これは悲しい出来事で、あまり我々は知らなかったけれども、ああそんなことがあったんだなと思いました。来た和人も、最初に入植した所で失敗した人たちが大勢いますね。十勝は依田勉三さんの一族も跡形もなくなってしまった。アイヌの方たちも苦労した、本州から来た人たちも苦労した。そういう歴史が忘れられないように、この際、振り返りたいですね。と言うのは、今、子どもたちは、非常に安定した、豊かな生活をしていますから、自分の先祖がどうだったということをほとんど知りませんね。関心ありませんね。でも、先祖がどんな苦労をしたかということをお教えないといけないとつくづく思います。

鈴井さんがアイヌの歴史を勉強したいと。ぜひ勉強してください。人の心に訴える力をあなたはもっている。私は何をしようとあまり影響力はありませんけれども。影響力のあるあなたは、北海道の150年の間に、どんなことがあったのか、その上に我々はいるんだということを伝えて欲しいと思います。

三好さんのお話は、全く同感ですね。高橋知事と並べて私まで名前を挙げられて、あなた方は北海道生まれじゃないでしょうと言われました。全くその通りですけれども。受け入れていただいて非常に感謝しております。私もまもなく77歳ですから、もうまもなく引退しますけれども、受け入れてくれた、しがらみの無い北海道というものを大事にしていくということに私も協力したいと思っています。

以上です。

● 山口委員長（北海道大学）

皆様ありがとうございました。

いろいろな角度から、まさに150年の歴史を振り返って、北海道としてみんなどう暮らしてきたか、心を込めたお話を伺いました。こういうお話をもとに、議事2につきましては、本日の皆様のご意見を踏まえて、基本方針の素案に向けた作業を進めさせていただきたいと思います。

議事3の「作文募集」と「アンケートの実施」につきまして、ここで改めて皆様のご了承をいただきたいと思いますが、この「作文募集」と「アンケートの実施」につきまして、この方式でよろしいでしょうか。

● 各委員

異議なし。

● 山口委員長（北海道大学）

ありがとうございます。では募集につきましては、事務局で作業を進めさせて頂きたいと思えます。

それでは、ここで高橋知事から。

● 高橋委員（北海道）

委員長の委員としてのご発言をいただきたいと思いますが。

● 山口委員長（北海道大学）

私は冒頭でちょっとだけお話させていただきましたが、では、少しお話しさせていただきます。先ほども出てまいりましたけれども、大学も今かなり厳しい少子化の中にあつて、厳しい状況でありましてけれども、北海道大学もいろんな意味で、国策を負う部分もございますけれども、同時に北海道にそれを還元する。北海道大学は新たな学問を進め、特に近頃は産業界と同時にそれを進めていくということに邁進しております。そのこと自身、北海道にも寄与することになるのかなと思っております。その意味では、先ほどお話いただきましたが、道民挙げての意識を高めていくというところで、北海道大学で、札幌にあつて、皆さんに役立つことをちゃんとやっていますからということをお知らせします。

これが私の委員としてこの場でご紹介するお話でございます。

それでは知事お願いします。

● 高橋委員（北海道）

ありがとうございます。

今日、すでに1ラウンドお話をお伺いしている中で、いくつか形が見えたなというのがございました。例えば、伊藤委員が、「バーチャル北海道民」という構想をITの視点からやりたいというお話に、菊谷委員が呼応されて、そういう場を使って野菜を徹底的に売りたいと。こういうひとつの方向性がもう出たと大変嬉しく思う次第でございます。

石森委員からは、北海道博物館で、武四郎特別展をもうすでに企画いただいているというのも大変ありがたいと思いますし、また、あのエリアのさまざまなハードの、開拓村、百年記念塔といった、50年前に作ったものが今危険な状態になって、いま、見ていただけない状態になっていますが、私も、先般、拝見させていただきましたが、そういうところをどう整備するのか。それは2020年に向けて白老で整備をされているアイヌ博物館、あるいは共生空間、国定公園とのコラボレーション、全体としての整合性という話も出てくるわけでありまして、我々150年がひとつの節目でありますけれども、その先も見通して、いろんな事業を考えていかなければならないという思いを改めて持つところでございます。

あとはそれぞれご意見をまとめて、次の会議までに、ご意見を深掘りをするということを事務局としてやらなければならないと思うのですが、私の委員としての意見を一点言わせていただきます。

それは今子どもでいらっしゃる方々が、150年の次ですから200年のときにちょうど私ども世代になって、まさにその時の北海道を支えていただく方々になっているのだと思います。50年前に平行移動しますと、百年事業というのは、開拓百年ということで、ちょっと私的にはコンセプトが違うなという思いもあるわけでありまして、いずれにせよ50年前の事業があった。その頃の小学生のお子さんだった人たちは、今、ちょうど50代半ばのまさに北海道のいろんな場面で支えておられる方々に育っているわけでありまして。先般、そういう方々と50年前にやった事業で何か覚えていることがあるかという話をしました。ぜひ、そういう意味で、私は今の子どもたちに「150年の時にはこういうことをやったんだ」とその時のインパクトが強くて、僕たち私たちが頑張つてこれからの50年の北海道を支えていこうと思ってもらえるようなことを何かやりたいなど。

それは多分、やはり鈴木委員のコンテンツというか、ビジュアルの世界も大変重要であると思えますし、またITということもあろうかと思えますし、またハードもののさまざまな記念事業もあろうかと思えますが、そういう意味で、改めて50年前子どもだった人たちが、今に至って、おぼろげ

ながら何を覚えているかということをおもとしてもう一度しっかりと把握をし、そういったことも含めて、次回以降の会議でご提案を申し上げたいと思った次第であります。

本日は誠にありがとうございました。

● **山口委員長（北海道大学）**

ありがとうございました。それでは、議事の4番目に移ります。「北海道みらいワーキングの設置」につきまして、事務局から説明をお願いします。

● **岩崎北海道 150 年事業準備室長（事務局：北海道）**

【資料1】の設置要綱第6の(3)と(4)をご覧いただきたいと思います。

みらいワーキングには、座長を置くこととし、その座長は委員長が指名することとしております。それでは、山口委員長から、みらいワーキングの座長の指名をお願いいたします。

● **山口委員長（北海道大学）**

それでは、みらいワーキングの座長には、小磯委員を指名したいと思いますが如何でございましょうか。

● **各委員**

異議なし。

● **山口委員長（北海道大学）**

それでは、小磯委員、よろしく願い申し上げます。

● **小磯委員（北海道大学公共政策大学院）**

みらいワーキングの座長ということで、今ご指名をいただきました。大変大役だと思いますが、お引き受けをさせていただきたいと思います。ワーキングのメンバーを改めて拝見いたしますと、若い世代で幅広い分野で活動されていて、なおかつ北海道内各地で活動されている、そういう方々の考え、ご意見あるいは提言というものをいろんな形でこの検討会議の場にお伝えしていくのが私の役目だと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

● **山口委員長（北海道大学）**

それでは、最後に、全体を通して特にご発言があればお願いいたします。

● **各委員**

（発言なし）

● **山口委員長（北海道大学）**

それでは、本日の議事はこれにて全て終了しました。議事進行に協力いただきまして、誠にありがとうございました。それでは、事務局にお返しいたします。

● **平野政策局長（事務局：北海道）**

山口委員長、議事の進行ありがとうございました。また、委員の皆様から貴重なご意見をいただき、感謝申し上げます。

今後のスケジュール等でございますけれども、本日いただきましたご意見、また、みらいワーキングでの議論を踏まえて、次回の検討会議までに、基本方針の素案を整理させていただきたいと思えます。委員の皆様方には、適宜ご報告・ご相談させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

また、本日のご了承いただきました作文募集及びアンケートや意見募集につきましては、速やかに実施をさせていただきます。

なお、次回の検討会議は8月8日（月）を予定しております。開催時間など正式なご案内については改めてさせていただきますけれども、予めご承知おきいただき、スケジュール調整につきましてご配慮をお願いしたいと思います。

本日は、誠にありがとうございました。

（以上）